

もつと知りたい
ふるさと

41

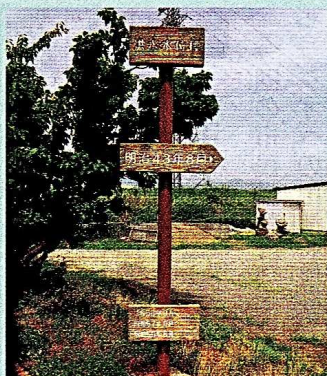
水とのたたかいは
土口石積みみの住居

土口公民館の北側、親水公園の堤防上に明治以後の洪水の水位を示す水位標が建てられている。明治43年と昭和50年代に3件の計4件が記録されている。今回は明治43年の洪水について考えてみたい。

ちなみにその高さを測定してみると、この時の水位は足元の草地から丁度2尺であった。草地は堤防上にあるので県道須坂屋代線の路面よりはかなり高い。

記録によるとこの洪水は明治以後最大のものであった。

「明治43年8月11日、大洪水。10日午後8時から水は土口小路へ入り、11日午前5時まで増水。土口床下浸水3戸を除き全部床上浸水。2階上浸水13戸、田畑居士多い処2尺。」



土口の水害の記録を示す水位標

この年の水害をはじめ、土口の集落では明治19年から同44年までの26年間に、大小18回の水害を受けている。水害の常襲地帯であった。

その昔、千曲川は旧篠ノ井の唐猫神社の南端で流路を南東に変え、「雨宮の渡し」付近で東に流れ、さらに宇佐美橋下流で土口の集落に沿って北に流れ、笹崎の突端を回って北東に流れていた。当時の千曲川の流れはかなり蛇行したものであった。

また、流路の勾配も緩くなり、水害の時には雨宮・土口の田畑は湖のように一面濁水で溢れていた。

さらに、この頃の堤防は霞堤（堤防が河川に沿って連続したものではなく所々切断され、二重三重に築かれた堤防）で水を防ぐためというより、流れを緩やかにするためのものであった。

以上の事から土口の水害は急流による流失ではなく、浸水による被害が多かった。しかし、長時間の濁流の湛水に

よる被害は大きく、水が引いた後、田畑に堆積した居土の処理に困窮した。明治43年の洪水で、田畑の居士は2尺、つまり60センチも堆積したという。

秋が深まってから、ようやく田圃の整地に着手した。これがまた、新たに開田するような大事業で、居士を取り除くために何十人もの労力をかけて、どの田も片隅に土の山を築いた。

この惨害に痛め付けられた土口区民は悲愴な決意をもって、生仁川（現沢山川）の右岸に堤防築造を具に陳情した。県は対岸の雨宮区に異議がなければこれを許可する方針であった。早速、雨宮区と交渉を始めた。雨宮区には土口区の苦境に同情するものが多かったが、利害相反するため容易に結論が出ず、回答は延び延びになった。そして長い年月の間にはいつとはなしに立ち消えとなってしまう。

水害の非常対策と

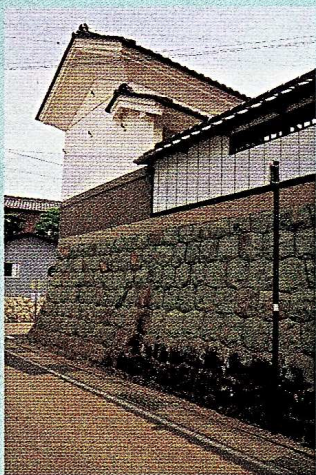
して、生命・住居を守りたいという欲求から各戸は競って居宅・物置・土蔵等の地上げ工事を行った。古川耕地の居士や笹崎の山の土取場は早朝から夕方まで、住居の地上げ用の土を運ぶ荷車で賑わい、古川耕地の居士も何年もかけて、ようやく片付けることができた。

一方、石垣の間知石は生萱の北山の石切り場と土口の神社の東の石切り場から運び出され、地元の石工さんを中心に積み上げられた。熟練の石工さんでも1日1個の石積み

がせいぜいだつたという。水害防止の悲願とためまぬ労苦の結果、現在の石垣の村ができあがった。

（資料 『雨宮県村誌』）
土口歴史民俗同好会会長

飯島 英雄



石垣の高さは3尺、その石積みは大変美しい